

おはようございます。
長崎大学人、河野茂です。

本日は、熱帯医学研究所長 金子修からの新型コロナに関するメッセージです。

新型コロナウイルスの世界的な動向、いつアフターコロナとなるのか？

熱帯医学研究所長 金子修

14世紀以降のペスト菌による黒死病パンデミックでは、ヨーロッパの人口が半減し、黒死病に対して有利と思われる遺伝子型がヨーロッパ人のゲノム配列を調べると分かるぐらいの選択圧がかかったとのこと（Immel et al. Mol Biol Evol 2021）。

世界的には COVID-19 により 2022 年 10 月 18 日までに約 655 万人の死亡者が出ていますが（<https://covid19.who.int/>）、ペスト禍への対応として始まった Quarantine（検疫）などを含む公衆衛生学的対応や診断キット・薬剤・ワクチンの迅速な開発により、COVID-19 パンデミックはよく制御されていると思います。

もし、14 世紀に COVID-19 パンデミックが起きておれば、ヒト集団のゲノムに痕跡が残るぐらいの死亡者が出たのではないのでしょうか。

現代に生まれてよかったです。

COVID-19 パンデミックは、それによる死亡者や後遺症に加えて、多数の感染者への対応のために、他の疾病に対する医療活動が妨げられる医療崩壊と言う事態を世界中で引き起こしました。

私の専門である熱帯病のマラリアも、これまでの対策により年間死亡者数は 2019 年には世界で約 56 万人まで減少していましたが、コロナ禍により対策活動が妨げられ「対策崩壊」とも言うべき事態となり、2020 年には約 63 万人に増えてしまいました。

他にも、貧困国に蔓延している「顧みられない熱帯病」と呼ばれる一群の感染症に対する対策も滞り、感染者数・死亡者数の増加が懸念されています。

一方、先日、アフリカのある国では COVID-19 流行に伴い、他の様々な感染症が減少したとの学会報告を聞きました。

呼吸器感染症に対する公衆衛生学的予防対策により減ったのでしょうか。

興味深いのはマラリアと同じく蚊で媒介されるデング熱患者も減少していた点です。

調べるとアフリカだけでなく、東南アジアやアメリカでも減少しているようです（Chen et al. Lancet Infect Dis 2022）。

同じ蚊媒介性感染症なのに何故、正反対の影響が出ているのでしょうか？興味深いです。

さて、「いつアフターコロナとなるのか？」についてですが、私個人としてはマラリアによる死亡者数がコロナ禍以前に戻ったときにアフターコロナと感ずるのではないかと思ひます。

「アフターコロナ」を国際的移動を含めた行動制限の完全撤廃以降と定義すると、既にアフターコロナの国は多数あり、日本においても政府決定を待つだけです。

しかし、SARS-CoV-2 ウイルスそのものはなくなるので、ある研究者は現時点での行動制限撤廃は日本の人口構成が変化するぐらいの高齢者の大量死を招くと予想されています。そのような事態にならぬよう画期的な対策法が見出されることを願っています。

金子先生、深い洞察のあるコメントをありがとうございました。

いつからアフターコロナになるという予想や断定は、政治的な側面、医療的な側面、さらに疫学的な側面などあり、はっきりとした予測は非常に難しいことがわかりました。

さて、皆さん、今月は、専門家の先生に、100年に一度の長崎の街の変革と本学の未来、世界の経済の流れから俯瞰する本学の立ち位置、教育の価値と価格などを論じて頂き、様々なことを考察しました。

また、ワクチンの問題や今後の新型コロナウイルスの状況なども考えました。

大学という学問の場にいる学生や教職員の使命は、常に最先端の専門家の意見に耳を傾け、考えることだと思います。

ぜひ、参考にしてください。

今回の専門家の先生方からのメッセージ配信は本日で終了です。

ひとりの大学人としては、幅広い知識や深い洞察をしながらも、目の前のやるべきことをコツコツと積み重ねる以外に、未来はやって来ないと改めて思いました。

お互いに、今日も、一歩、前に進みましょう。

それでは、また、次回。